

現代福祉学部国内研修 報告書

1. 国内有数の馬の生産地（岩手県遠野市）研修
2. 東日本大震災から学ぶ地域づくり

1. 国内有数の馬の生産地（岩手県遠野市）研修

岩手県遠野市は、古くから馬と強い関わりを持つ町である。遠野市を歩き回ると、地名に「馬」が多く使われていることが目についた。古くからあるお土産屋のお方のお話しによると、数十年前まで、町中に馬が見られ、馬と人が一緒に暮らしているようだったと言っていた。このような町から、私は、馬と人の関わりや、協働することの意味を学びたいと思った。そこで、馬搬振興会の元で、林木の運搬を見学することができた。森林の中から、木を運ぶ作業を実際について行き、馬と人がどのように協働し、作業をこなしているのか等を自分の目で観察、考察した。

機械を使って木を伐採するのではなく、切られた木を馬と人で運ぶ。これは、昔から日本でよく行われていた方法だということを知った。何度も森の中を馬と人が通ることで、森の中には道ができていた。森林を手入れすることも同時に行われている。作業を観察して、馬の潜在能力は非常に高いことが分かった。馬の能力を引き出すには、それに見合う人が必要であるということも学んだ。馬搬には、賢い馬を引っ張っていく技術を持った人の方が重要であると現場の方が強調して言っていたことが印象的であった。実際に、馬術部の部員や一部の男子は、馬をリードして木を森から運無ことを体験していた。馬を引っ張っている時の人の表情は非常に明るく、生き生きしていた。馬の人に与える心への影響が出ていたのではないかと考えた。

馬はスポーツや数学のように、言語や人種を越える、世界共通のものであるということに気が付いた。日本は、近代化が進み、馬の文化が限りなく薄れてしまっている。しかし、世界では、さまざまな場面で馬が活躍しているということを知った。ヨーロッパでは、昔からの文化が残り、馬と人が共に生活をしている。例えば、フランスでは、ゴミ回収のトラックの代わりに、馬が引いて運んでいる。そうすることで、ゴミを無闇に捨てることがなくなり、また、排気ガスを排出することもなくなる。機械で木材を獲得しようとする、森林の広い敷地面積を削ってしまうという問題を知った。馬を使うことで、環境破壊を防げることを学んだ。環境に配慮した、サステナブルな社会のためには、機械では

なく、馬を使うことが一つの解決策となるのではないかと考えさせられた。

よって、遠野市馬搬振興会での研修から、馬と人の良い関係には、大きな力があるということを学んだ。また、世界の国々には、日本よりも更に、馬が多くの中で活躍し、サステナブルな社会づくりに貢献している。そのため、フランスなど世界から、学ぶことができるのではないかと考える。馬と人が協働し、さまざまな技術と組み合わせて工夫することで、今後更に飛躍できる力があると感じる。馬と人の関係は、より良い、サステナブルな社会を築く方法の一つであると考え。サステナブルな社会作りのために、これからも更に、調べていきたいと思う。

2. 東日本大震災から学ぶ地域づくり

私は 2011 年 3 月 11 日は海外に住んでいたため、東日本大震災をテレビで見ていた。津波が町中を襲う映像を目を疑うように必死に見ていた。この研修を通して、陸前高田市出身の仲間と共に、町を巡りながら、当時の経験を伺うことができた。そして、岩手津波記念博物館にて、資料や映像などを通して勉強することができた。

私たちは、海岸沿いの大船渡市、陸前高田市、気仙沼市に行った。そこで、震災後のまちづくりにおける大きな違いが見受けられた。陸前高田市には、海沿いに高さ 12 メートル、全身 2 キロの巨大防波堤が立っていた。人の命を守るために建てられた巨大防波堤であるが、防波堤沿いを進むと先の見えない壁が迫ってくるような気持ちになった。海がすぐ近くにあるにもかかわらず、そのように感じることはできなかった。海沿いに暮らす醍醐味であるきれいな海の景色がなくなっていた。海を見ると心が晴れるが、ここでは、壁で気分が暗くなってしまうように感じられた。その影響か、海沿いに住宅は無く、草が生い茂った空き地が広がったままであった。防波堤があり、外観が良くないことや復興に時間がかかってしまったことから、陸前高田市の住民は、海岸沿いではなく、少し奥に進んだ山の方に移り住んだということを知った。反対に、大船渡市には防波堤はなく、古くから続く、漁業が栄えており、町に活気が見られた。湾の近くには、ホテルやお店が多くあった。震災後の一つの判断で、街の雰囲気が変わってしまうというまちづくりにおける判断の重要性を学んだ。

夜には、大船渡市と陸前高田市の伝統的な夏祭りに参加した。大船渡市のお祭りでは、地域の人々が交流し、花火が上がり、とても賑わっていた。陸前高田市には、各町が山車を作り、町の人みんなで山車を引っ張り、隣町の山車にぶつかっていくという古くからのお祭りがある。その日は、震災を忘れて、町が盛り上がっていたように感じた。祭りを通してコミュニティが活性化され、人々のつながりを深めることができると感じた瞬間であっ

た。そして、このような町の人との繋がりや、まちづくりにおいて、最も大切なことなのではないかと気付かされた。

初めての被災地訪問を経験して、テレビや話では感じることはできなかった、生の実態の把握やお話を聞くことができた。震災の日、人がどのように行動したのか、いつまで家に帰れなかったことや、亡くなった方の情報や帰ってこない家族の情報をどのようにして得ていたのか、など詳しい当時のお話を聞くことができ、貴重な時間であったと感じている。また、訪問前は、被災地での一つの判断がまちづくりに大きく影響すると考えていなかったが、訪問後には、被災後のその町にとって最も重要なのは、町を復興させるためのまちづくりだと考えるようになった。この国内研修は、私にとって、被災地の復興と災害について知る機会と環境配慮に向けた新しい視点を獲得する機会となった。

参考文献

日本経済新聞「陸前高田に巨大防波堤 高さ12メートル、全長2キロほぼ完成」2017年1月30日（閲覧2023年8月19日）

https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG30H0B_Q7A130C1CC0000/